



養護学校の日々

線と点

津守 真

保育は日々の継続の中でつくられるが、一日の、あるひとつの場面を、保育者がどう見るかによって、全体の性質が変わってくる。継続を線とすれば、一日のひとつの場面は点である。線の性質は、既に引かれた部分によってではなく、先端の点の動きによってきまる。点は、その場の判断により、自らの方向をきめる自由をもつ。保育は、前日からの延長線の上でありながら、この日の時点で、その場面をたしかに見ることによって、新たな

動きをつくり出す。そのことを考えさせてくれた最近の保育について述べたいと思う。

レールからはずすこと

Tは床の上で自動車をいじっていた。私は少し離れたところでレールをつなげはじめると、Tはすぐに近寄り、自動車をレールの上にのせた。そのときに、車輪を半分レールからはずしている。私は電車をレールに置いて動かすと、いそいでとんできて、車輪を半分レールからはずしてしまふ。

この子どもは、長い間、回転する物を特別に好んだ。けれども、冬休みの明けたこの日、子どもの心には変化が生じているように思われた。この場面に、まるく循環するレールの束縛から自らをはずそうとする子どもの意志を、私は見た。

そこで、私は、レールをまるく連結するのではなく、方向をはずして、S字型に床の前方に開放するように置いた。すると、Tはレールの上を歩いた後、その途切れ

るところになると、広い空間へと歩いてくる。私が前方でTを抱きしめてひっくり返ると、ふだん声を出さないTがケラケラと笑う。それを何度もくり返した。そのうちに、Tは自分できめた方向に歩いてゆき、自分で見つけたボールを蹴ったり、ころがしたりする。机の下に隠れたボールがはみ出しているところがり出ると、声をあげて笑う。レールから自らをはずすことへの能動性が、更に積極的な自己実現へと向う第一歩であろう。

この日から後、Tは砂場に入り、水を流し、積み木を並べ、ガレージを作って自動車を出し入れするなど、その変化は目覚ましい。もはや、特定の大人とだけではなく、むしろいろいろの人たちと遊ぶのを楽しんでいるように見える。このような変化は、積み重ねられる日々の中で明らかになってゆくのであるが、その最初の時点では、未来は未知であり、それを開く鍵は、現在をいかに見るかにある。ささやかな一日のことであるが、この日のひとつの場面に、レールからはずそうとする子どもの意志を見ることがなかったならば、それにつづく時間

も、日々も、違ったものとなっていたかもしれない。

切ること

Kは、最初に私が見たとき、熱心に紙を切っていた。その瞬間を見ただけでもわかるのだが、Kはそのとき何か自分自身の活動をしているように見えた。しかし、Kが何をしようとしているのかは、子どもがその行為をやりとげるまでつき合わないとわからない。

Kは画洋紙の一端からはさみをいれ、へりに沿って切つてゆくので、私は渦巻を切っているかと思つた。ずっと以前に、二才になる私の子どもが、同じように折紙のへりに沿つて紙を切っていたことがある。紙の縁に沿つて直線に切る行為が、経果として渦巻になることを発見して、そのとき私は驚いた。Kが紙のへりに沿つて切るのも、渦巻を作っているのかと思つたが、その見方は、どうやら、この場合にはあてはまらなかつた。Kは途中から切り進んで、一本の長い紙片にし、はしから2センチメートルくらいに次々に切り、その切れはしを屑かご

の中に落していった。それを切つてしまうと、別の画洋紙を細長く切り、それも2センチメートルくらいに切り刻み、切れはしを一ヵ所に集める。それをやりながら、Kは私が紙を支えて切り易くすることを期待し、また、私の膝によりかかつて作業をする。そこにあつた数枚の画洋紙と、新聞紙も、同様にして切り、小さな紙片の山をつくつた。それだけやると、立ち上り、後も見ずに庭の方へと去つていった。

Kはこのとき何をしようとしていたのか。渦巻をつくらうとしたのではないし、ただ直線を切らうとしたのではない。もちろん、めちゃくちゃに切つていたのではない。これだけの丁寧な作業には、何かこの子どもとしての考えがあるにちがいない。しかし、それが理解されるには、Kの語らうとするもつと他の行為を見なければならぬ。Kとは、すでに過去二年以上のつき合いがあるのだが、この切る行為には、Kは未来への可能性がかくされているように思えて、過去の積み重ねの中だけで考えるのは早計に思える。もつと時間を待たねばならぬ

い。

しかし、このひとときの行為は、Kにとって次の行為を展開するのに意味をもっていたにちがいない。それが何であったか、私には分らなくとも、Kにとって意味のある行為が私との間で生み出されることはたしかだと思ふ。私の膝によりかかったり、私の手が支えることなしには、この行為は生れなかつたであろう。

二つの点は、ときに方向をきめかねて、互いに寄り添ったり、はなれたりしながら、共にさまよう。そのときに、思いがけず、面白い線の形があとに残るのではないか。

連休の合間の晴れた一日、二人の母親が、デニムの前掛け姿で、大きな箱に花の苗を一杯かかえて門からあらわれた。郊外に住む母親が運んできた花を、あちこち場所をさがして、保育の最中に植えてくれた。

二年間かかった隣接する建物の工事が終り、防護布もとれて、庭はようやく静かな落着きをとりました。二

週間前には、これも、三月に卒業した親の好意による植樹がなされ、都会の真中とはいえ、緑のある環境となった。狭いながら、椿、山茶花、木斛の並木と灌木との間に、小径もできた。数年の間に緑が茂って林間の哲学の道となる幻想を画く。

こうして、母親たちが、突然、花をかかえてあらわれると、私共だけでなく、親たちが、ここを子どもたちの成長する場所とするのにいっしょうけんめいになっている、その温かい思いが伝わってくる。保育の現場には、親たちとの相互性による支えがある。うかつに時を過せないという気になる。灌木の下にベゴニア、マリーゴールド、ひげなでしこが一列に並んで咲いているのを見ると、そのことを思い起させられる。

(愛育養護学校)